

雑感「平泉―世界遺産をめぐる騒動―」

住職 千坂げんぼう

一関地方では、平泉の浄土庭園を中心とする奥州藤原氏による遺跡、遺産をユネスコの世界遺産にという運動で賑やかである。このことは樹木葬通信四十号でも触れておいた。その際、上から（行政主導）の運動にならないようにと言及したが、その危惧が現実化した。審査機関であるイコモス（国際記念物遺跡会議）が「登録延期」の勧告を出したからである。



中尊寺近くの外来種・フランスギク

平泉の遺産が「浄土思想」をコンセプトにして、世界遺産を狙っていることは報道されても、詳細は流れてこなかった。関係者が勝手に運動することを恐れ、ユネスコへの報告書を公開しなかったのだという。このような秘密主義、民間の力を無視するお役所体質がイコモスの厳しい勧告につながったと考えられる。日本史の学者と関係寺院の意向を受けて行政が作成した報告書が、歴史的価値を評価し、浄土の理念の崇高さを謳い上げることが明瞭だった。しかし、その価値の高さを自負することが、かえって「世界」の基準を無視してしまったのではないか。

新聞などで見える限り、私が以前から警鐘を鳴らしていた町並みの汚さ、外来植物やクローン種のソメイヨシノに対する意識の低さ、景観を意識しない電柱、歩道など、現在のマチの景観が、「世界遺産」の障害になるという意見はほとんど見受けられなかった。

そのことは、中尊寺供養願文に見られる平和主義と、現在のマチづくりが脈絡を持つてこなかったということを示すのであろう。願文に見られる平和主義は崇高であるが、何時の世も権力者は、自分たち一族の権力下での平和の永続を願ったのである。したがって崇高な理念が謳われているからといって貴いのではなく、地域の人々がその理念をどのように受け継ぎ現実化してきたかが問われるのである。

「阿弥陀経」では極楽浄土世界を美しく描いている。よいにおいのする木々や花がいつ

ぱいに咲いた茂みがある」「数多くの鳥が、常に優雅な声を出し」（仏教伝道協会訳）その他、水辺に集う鳥たちや風にそよぐ木々、清らかなかおりを発する花など、まさに、今風に言えば、多様な生物が共生する空間そのものではないか。

奥州藤原氏は經典に描かれている世界をこの世に現前させようとし、池を主要施設に造った。中尊寺の大池跡の他、無量光院遺跡、柳之御所遺跡、衣川遺跡群、すべてに池跡が確認されているのはこのためである。かつての権力者がいかに水辺空間を重視したかが分かる。しかし、現在では、毛越寺と観自在王院跡池が往事の水辺空間を思い起こさせるだけである。

昭和三十年代に平泉町内に残っていた池は埋められ今の俗悪な観光地化が進んだ。その結果、八百年以上昔に、浄土思想に立脚して造られた都市の面影は、中尊寺の伽藍と、毛越寺の庭園のみとなってしまった。地域の人々、行政は浄土思想による水辺空間の重要性を理解したマチづくりをしてこなかったと言うべきである。このように、自然と共生するマチづくりを無視してきた地域に「浄土性」を感じないのは当然であろう。イコモスの勧告は、客観的に妥当性を持つと思われるのである。

一連の騒動を他山の石として、私たちは樹木葬の原点をより見つめ直す必要がある。生態系保全こそが、今、日本の自然に求められているのではないか。